

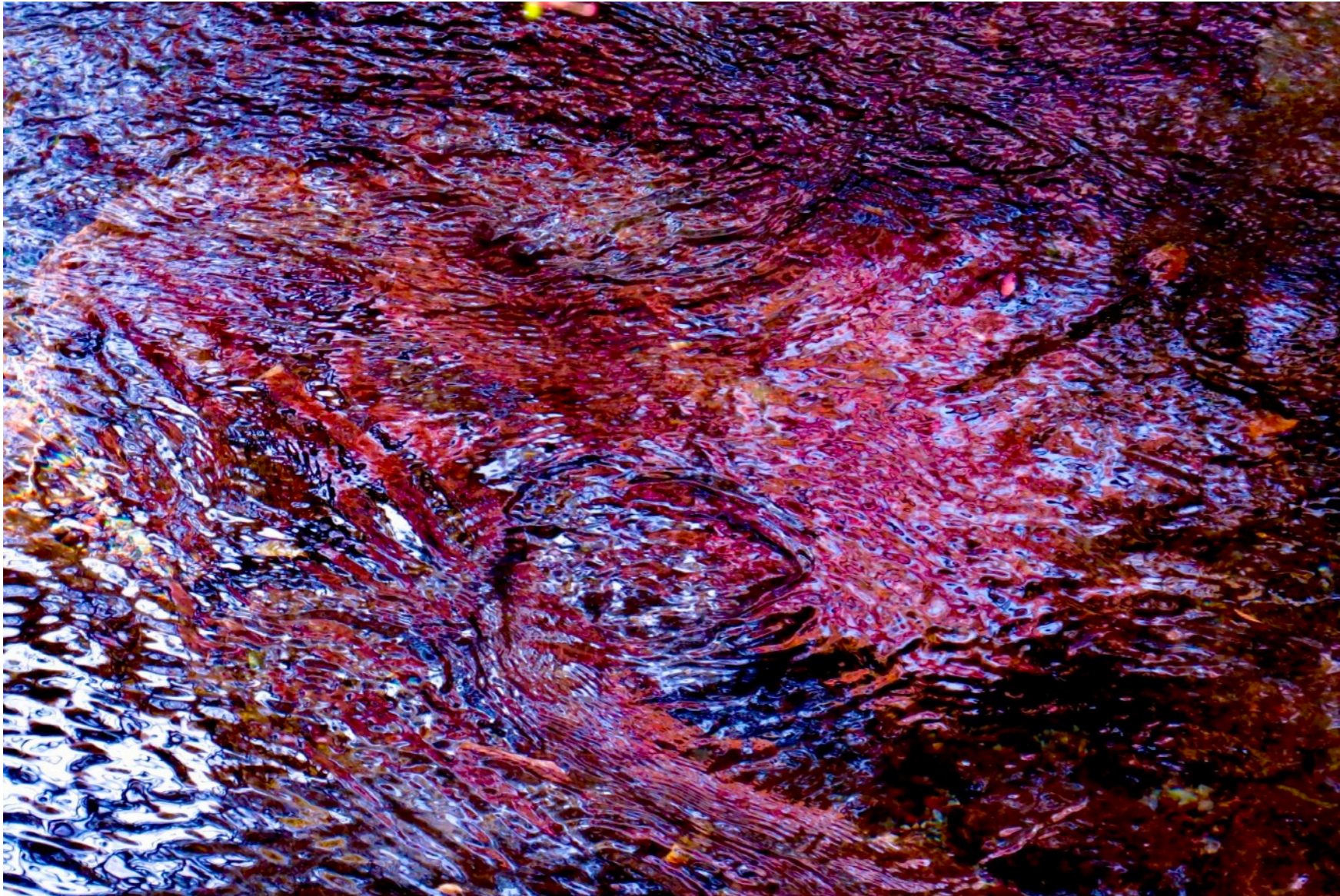
神秘学ポエジー 風遊戯
photopos
110

【神秘学ポエジー～風遊戯 第220集】 photo ヴァージョン

photopos 2726-2750

《2022.2.23～2022.3.19》

神秘学遊戯団

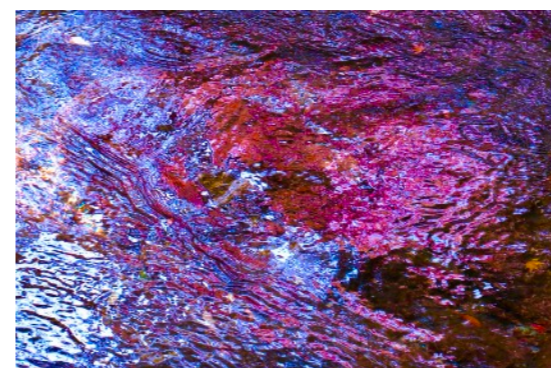
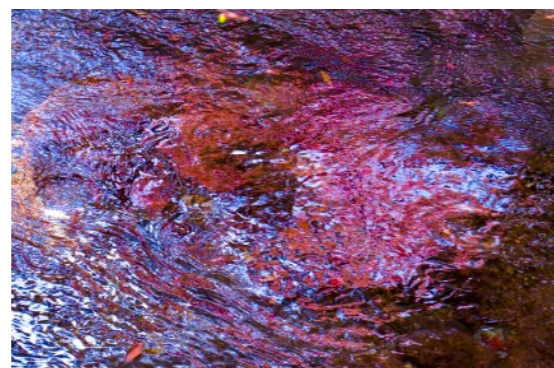
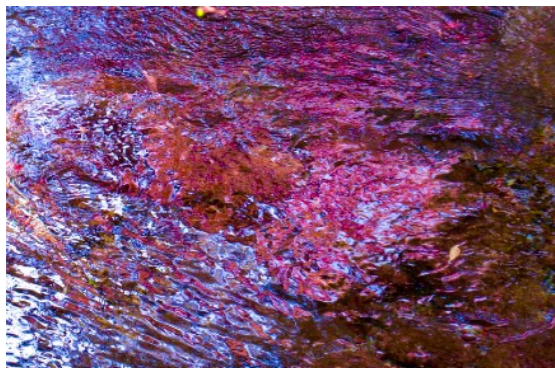


いのちとは
ひたくれなゐに
染まる血汐なり

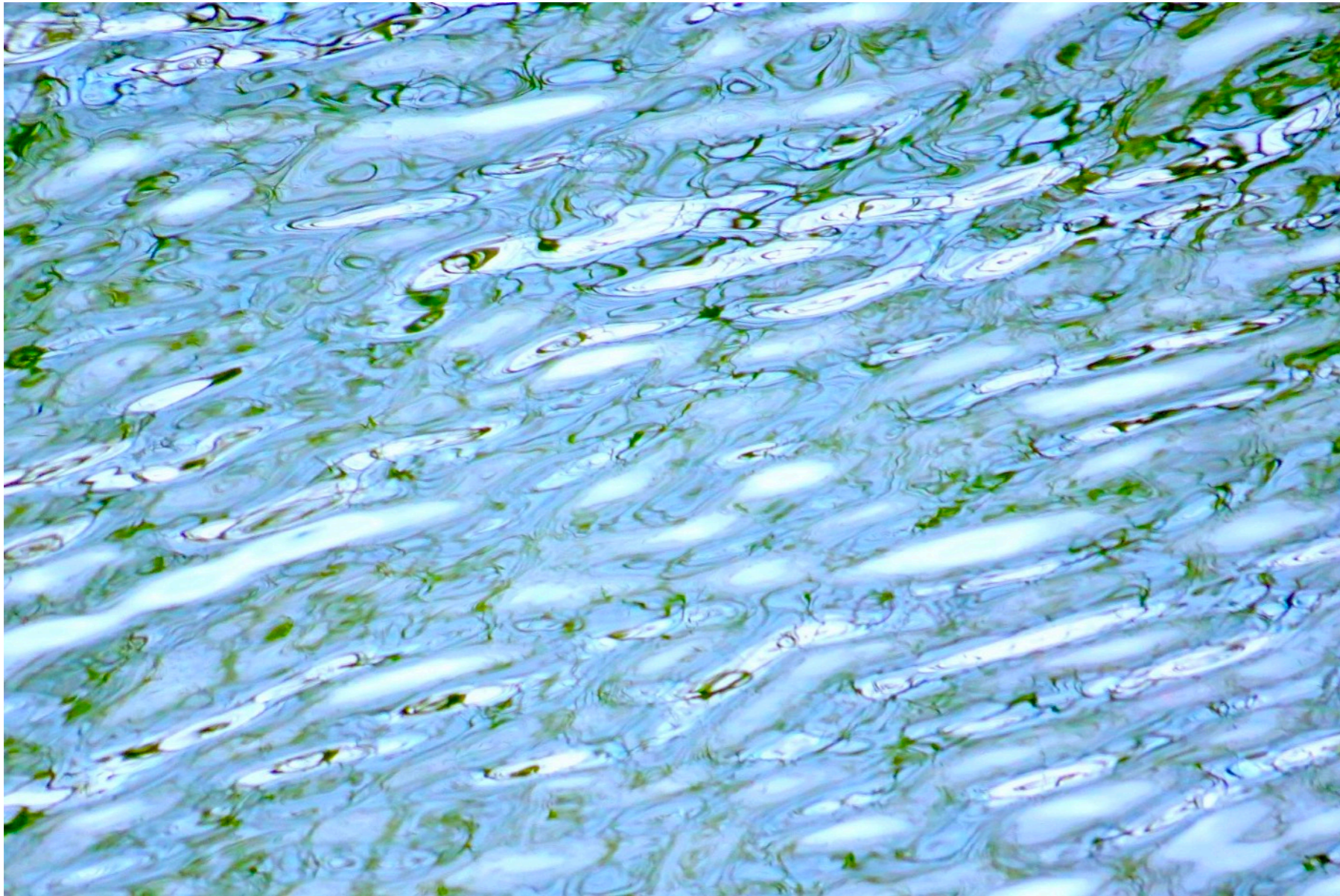
生のみならず
死を巡りてもなを
流れつづける
魂の河なり

光と闇の
彩に織り成され
不思議の模様を
描き止まない時なり

ときに荒野に
ときに花の野にありて
切なる言霊で染められる
祈りの歌なり



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



さあ耳をひらいて

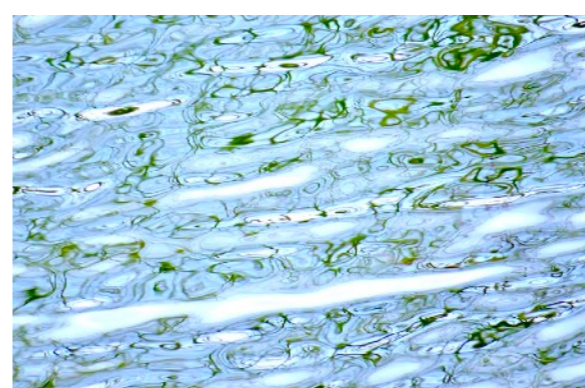
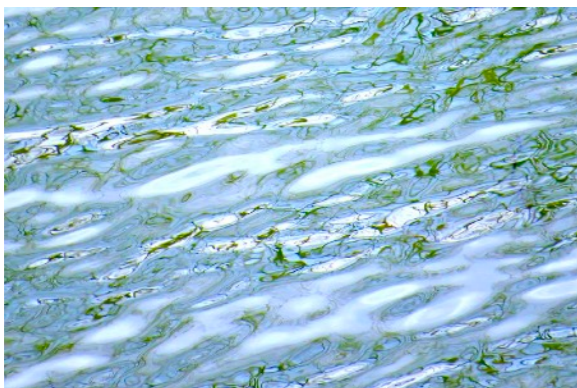
風も水も樹も岩も
すべてに魂は宿り
それぞれの言葉で
語っていることに
気づいているかい

さあ目をひらいて

見えるものだけが
世界じゃないから
見えない世界にも
世界があることを
忘れちゃいけない

さあ心をひらいて

わたしたちはいま
多次元宇宙の中を
旅していることに
気づきさえすれば
すべては変容する



☆photopos-2728

2022.2.25



わたしの言葉は
どこかですでに
もとの言葉から
翻訳されている

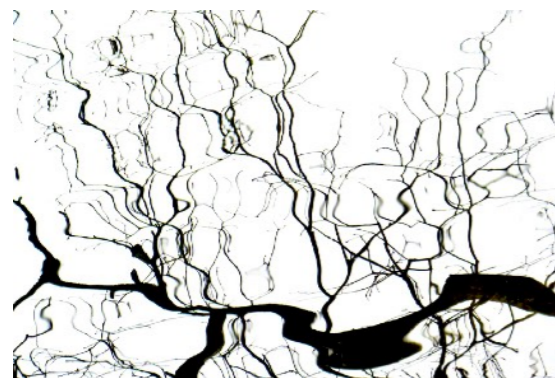
もとの言葉のことは
知られないままに

わたしのいる世界も
どこかですでに
もとの世界から
翻訳されているのだろうか

もとの世界のことは
知るよしもないけれど

わたしという存在もまた
どこかですでに
もとのわたしから
翻訳されているのかもしれない

もとのわたしは
いったいどこにいるのか
知られないままに



※愛媛県総合運動公園にて

☆photopos-2729

2022.2.26

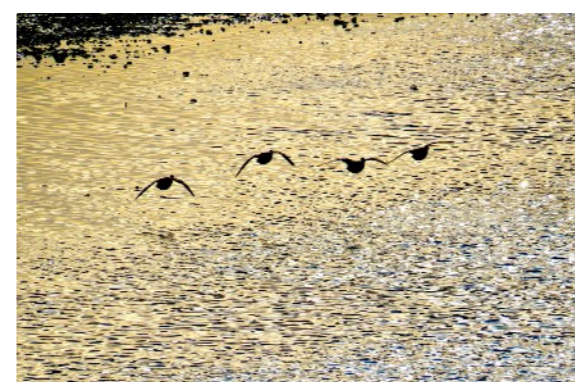


鳥の翼は
人の手になったが
人はその手で
空飛ぶものを拵えた

空飛ぶものは
爆弾も運び
街を人を
空から爆撃する

人の手は
生死を越えて
やがて人の頭になるが
人はその頭で
考えるAIを拵えた

考えるAIは
人の頭の代わりになり
そのAIは
人を操作するようになる



※愛媛県松山市・重信川河口にて



もう
子どもになっては
いけないから
子どものようになる

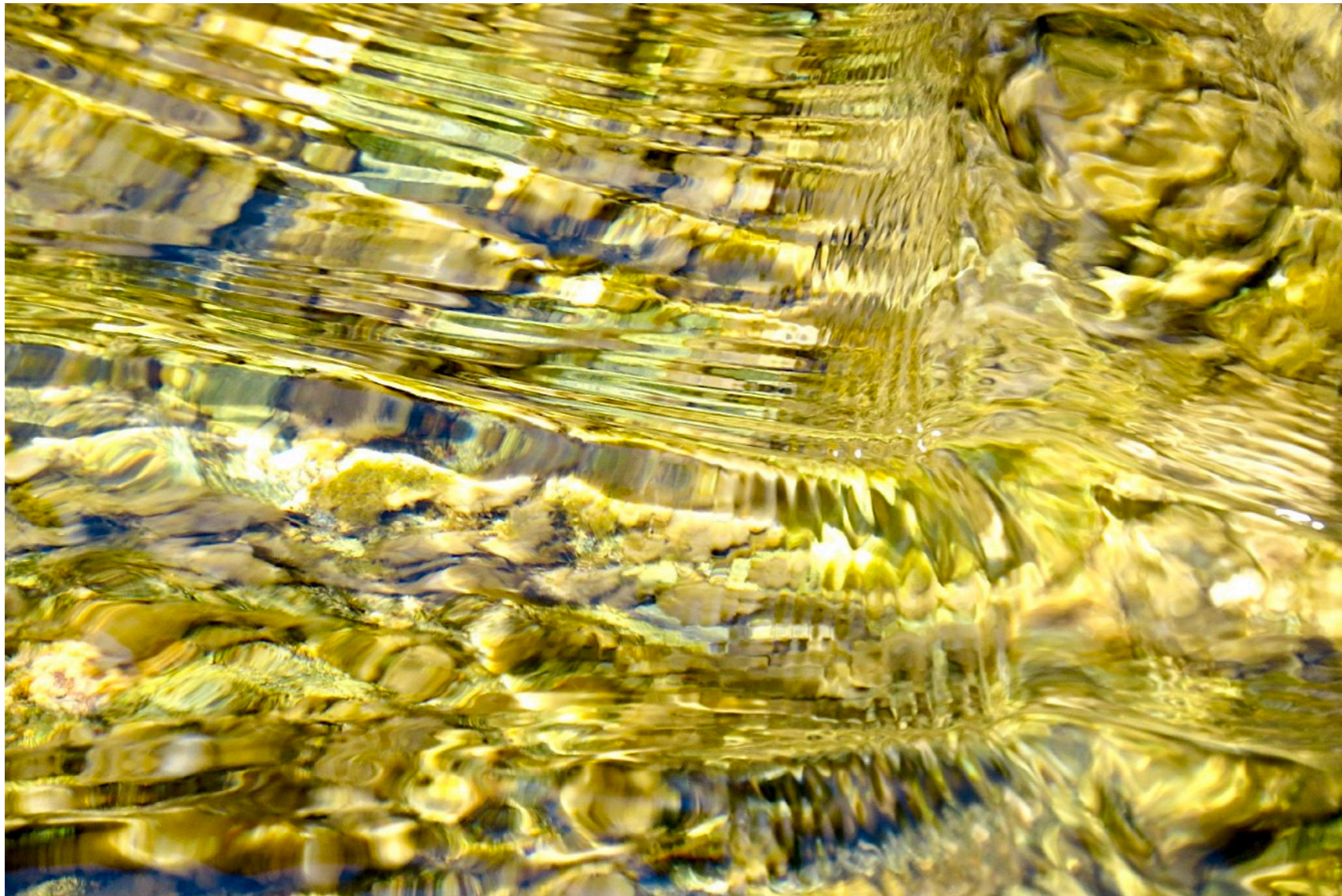
もう
むかしに戻っては
いけないから
むかしを新たににする

もう
時をもどすことは
できないから
時に奥行きをあたえる

もう
ことばなくすことは
できないから
ことばにほんとうの力をあたえる

もう
わたしでなくなることは
できないから
わたしとわたしでないものをむすぶ





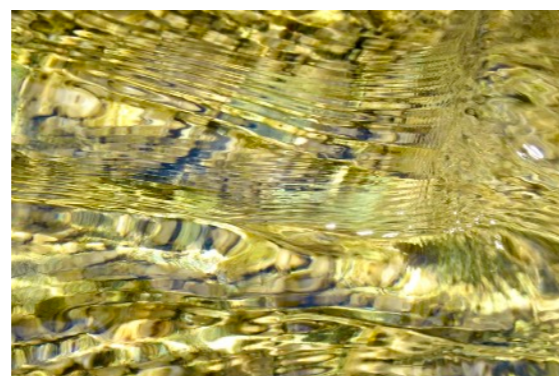
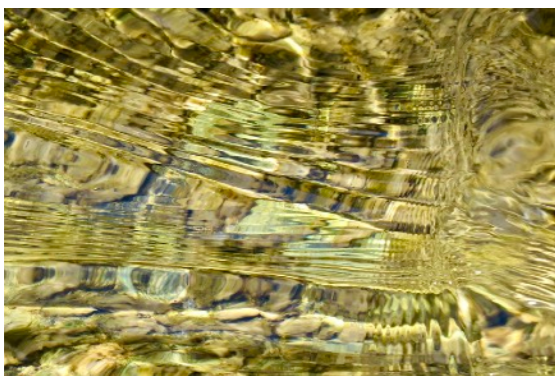
思い出せない夢のなかで
たしかにわたしは
水となって
流れていたのだろうか
世界を流れるわたしとして

思い出せない夢のなかで
たしかにわたしは
風となって
めぐっていたのだろうか
世界をめぐるわたしとして

思い出せない夢のなかで
たしかにわたしは
花となって
咲いていたのだろうか
世界を咲かせるわたしとして

思い出せない夢のなかで
たしかにわたしは
もうひとりのわたしとなって
歌っていたのだろうか
世界を歌うわたしとして

思い出せない夢のなかで
たしかにわたしは
時を超えて
夢みていたのだろうか
世界を夢みるわたしとして





与えられた答えには
問いが失われている

失われた問いを求めて
わたしは決められた答えを去り
見えない問いをゆく

与えられた言葉には
自由が失われている

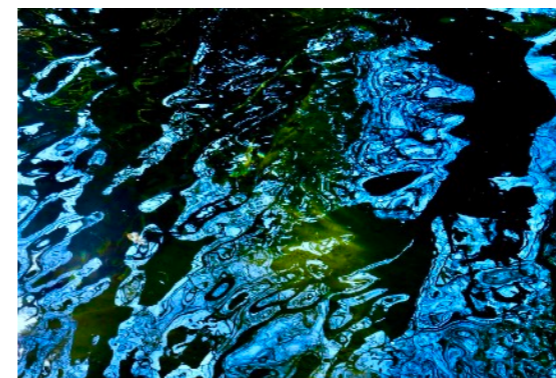
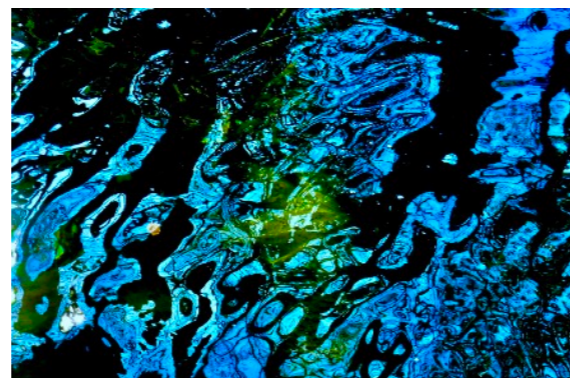
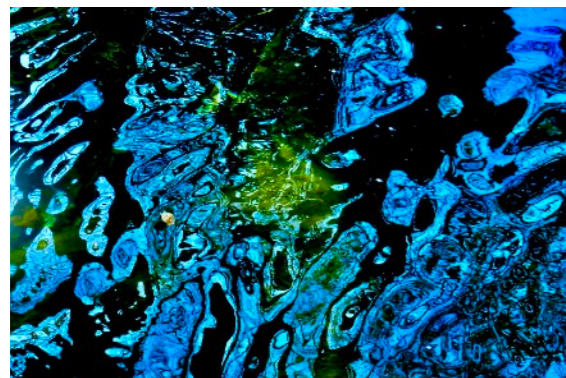
失われた自由を求めて
わたしは決められた言葉を去り
見えない自由をゆく

与えられた真実には
現実が失われている

失われた現実を求めて
わたしは固定された真実を去り
見えない現実をゆく

与えられた時間には
永遠が失われている

失われた永遠を求めて
わたしは決められた時間を去り
見えない永遠をゆく





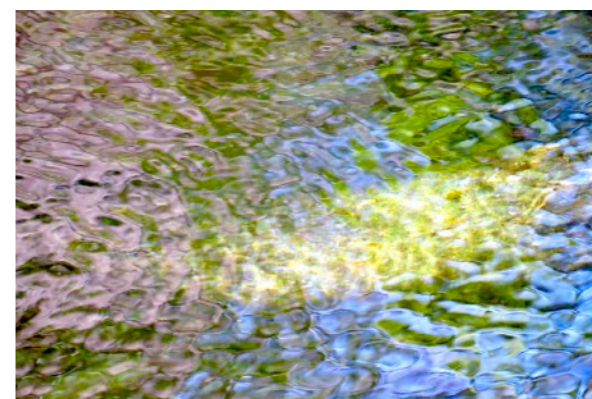
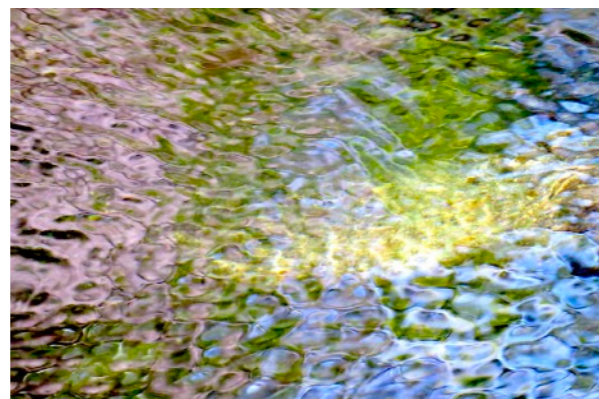
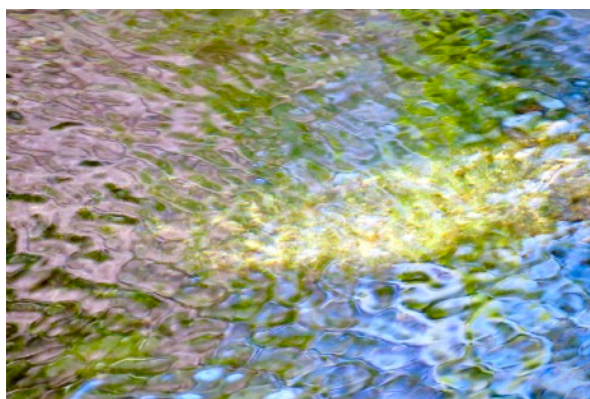
見えているのに
見えないものがあり
見ているのに
見ようとしないものがある

見たいものだけを
見ることはやさしい
見たくないものを
見ることはむずかしい

ほんとうに見ることは
じぶんを貫きながら
じぶんを超えていくことだからだ

超えるためには
剥き出しの生を
耐えていかねばならない

傷つきながらも
ほんとうに見ることができたとき
生はやがて聖なるものへと変容してゆく





わが影は
なにを望むか

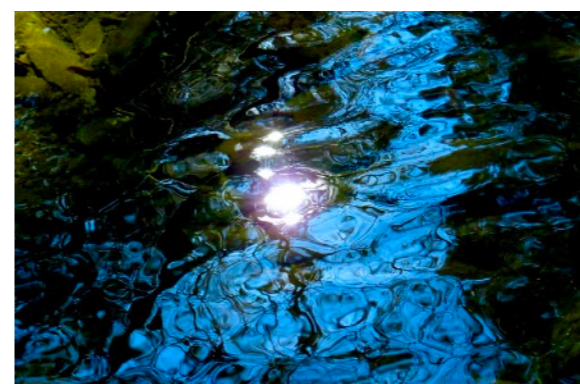
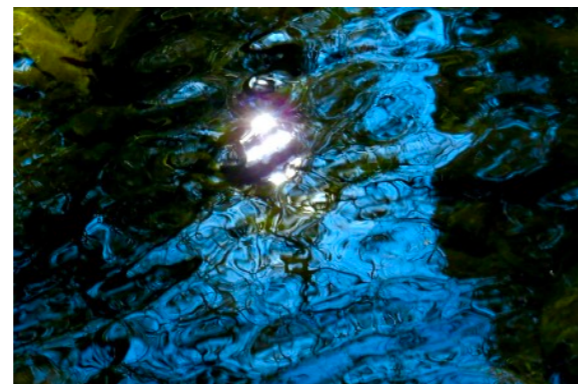
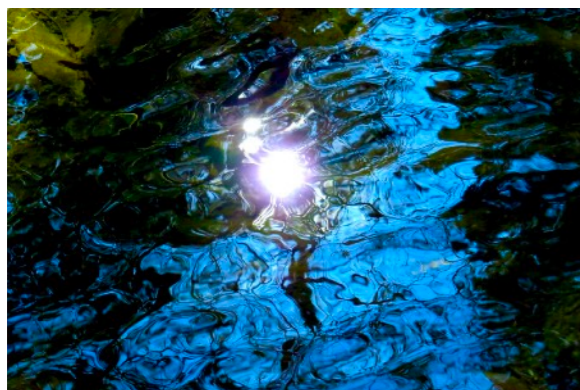
影に
従うか
影に
抗うか

影は
わが友にして
わが宿敵

影は
わが姿にして
わが光のつくる闇

されど
光なきところに
影はなく
影のあるところに
光はある

われは光と影のあいだを
激しく揺れ動いてやまない
光を求めながらも
光の生む影に魅せられて





思いのままに
なんにでもなればいいのに
わたしはいつも
わたしのままだ

思いのままに
なんでもできればいいのに
わたしはいつも
できないわたしだ

なにかになろうとして
なにかをしようとして
わたしはわたしでなくなってしまう

愚かだと思われないために
わたしはずいぶん
じぶんをべつのものにしている

愚かだと思われようと
わたしがなにものでもなければ
わたしがなにもしようとしなければ
わたしはわたしでいられる

愚かさを引き受け
なにかであることから解き放たれば
わたしはなににもならない自由を
生きることができる





見えない世界を
見るためには
見える世界を
たしかに見る力が
なければならない

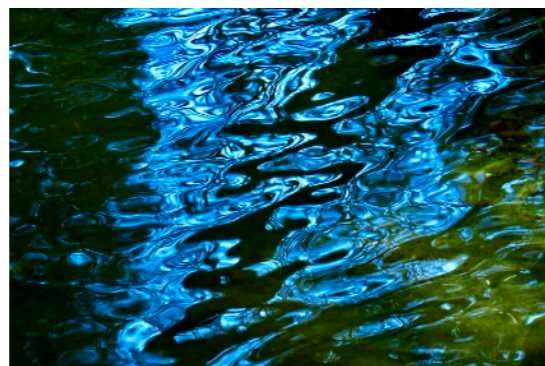
見える世界を
見るためには
見えない世界を
たしかに見る力が
なければならない

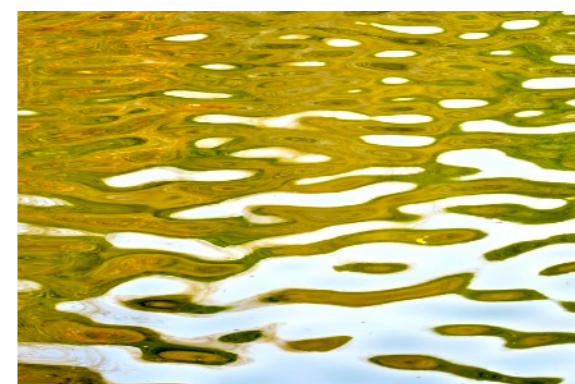
ふたつの力が
ひとつになるとき
はじめて世界は
ほんとうの顔を見せてくれる

沈黙の声を
聴くためには
言葉の世界を
たしかに紡ぐ力が
なければならない

言葉の世界を
紡ぐためには
沈黙の声を
たしかに聴く力が
なければならない

ふたつの力が
ひとつになるとき
はじめて世界は
ほんとうの歌を聴かせてくれる





意味がわからなくなったときは
なにがわからないのかを考える

迷路に入ったのかもしれない
そもそも意味などないのかもしれない

言葉には意味があるのだろうか
意味があるとはどういうことだろう

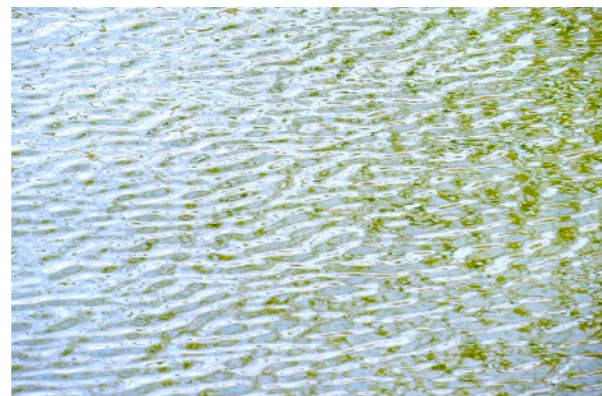
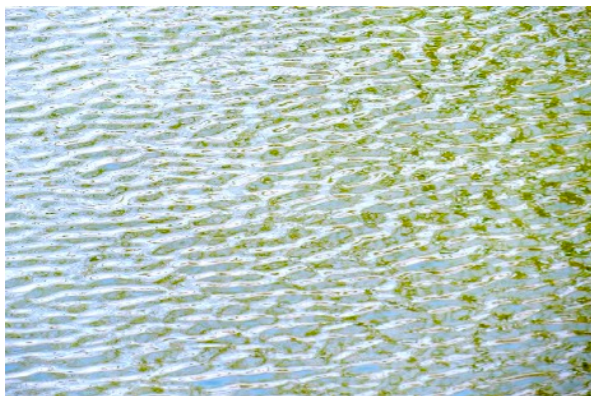
意味は生きて動いているから
それだけを取りだすと
もう意味ではなくなってしまう

意味が迷路に入ったときは
沈黙するか
それとも歌うかだ

語り得ないことは
沈黙しなければならないし

言葉は音楽だから
意味などわからなくても
歌うことはできる

ひょっとしたら
歌えばそこに
意味が生まれるかもしれない



時は不思議だ

時とともに
生きているとき
時を疑いさえしないのに

時とはなにかと
問われたとき
時のことがわからなくなる

時が流れるのならば
時はどこからどこへと
流れているのか

時が流れなければ
時は止まり
世界は動かなくなってしまうのか
それとも世界はなくなってしまうのか

いまこの瞬間は
過去と未来の間の点だろうか
点は時間なのだろうか
時間ではないのだろうか

流れる時があり
生きられる時がある
ふたつの時は同じ時なのだろうか
それとも違う時なのだろうか

永遠を生きられるならば
そのとき時は
どんな姿をしてあらわれるのだろう

時はこんなにも不思議なのに
わたしが時から離れることはない
わたしがわたしから離れないように

☆photopos-2739

2022.3.8



わたしには
顔があるけれど
顔がわたしなのか

鏡にうつる顔は
ひとつの仮面だろう

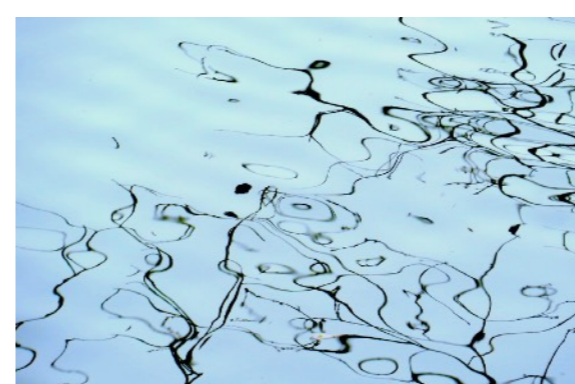
仮面を被っても
それもひとつの顔だ

顔は
水の面のように
世界をうつし

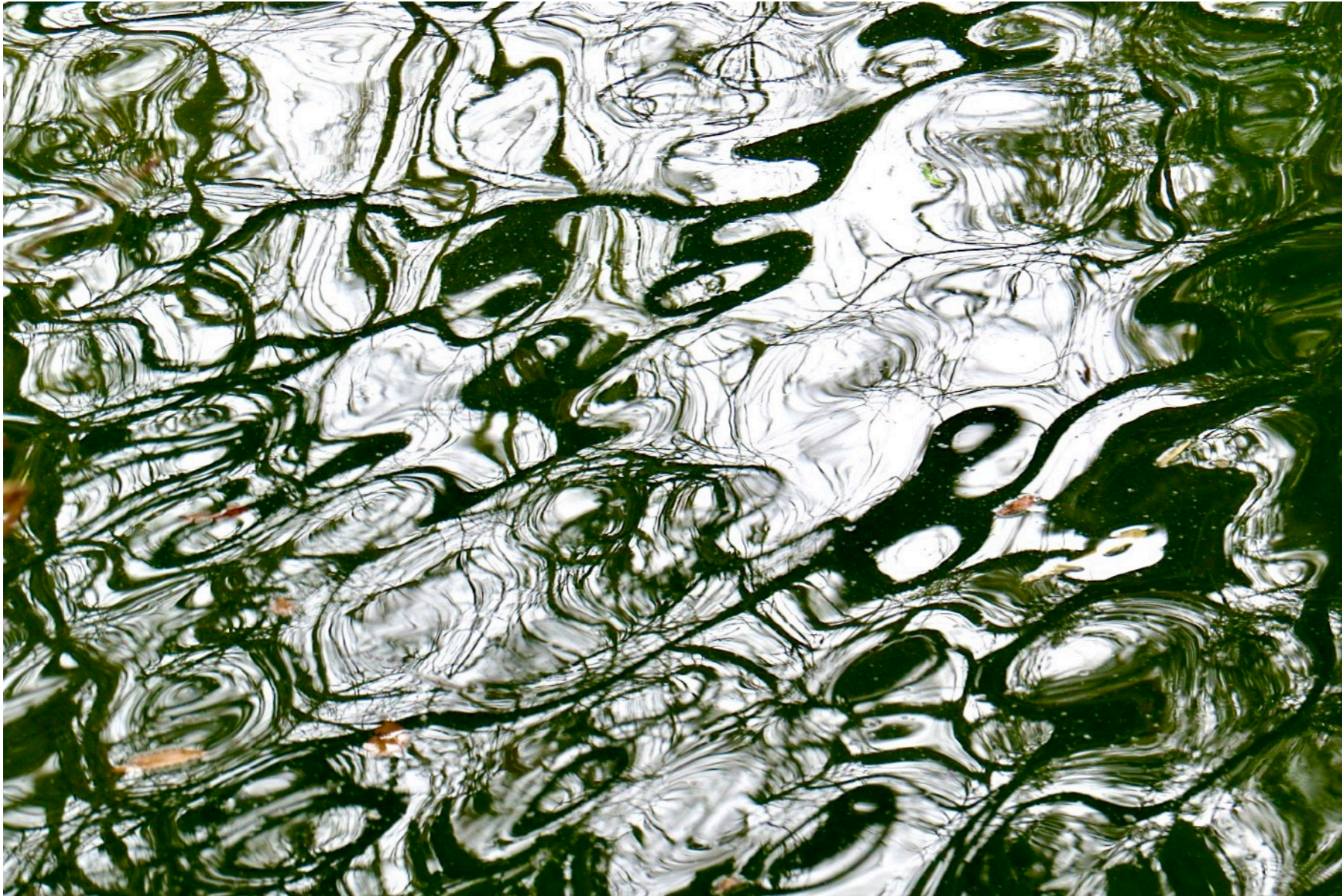
光と風のなかを
遊戯し変幻しつづけ

ときに
あなたに照らされ
ゆれ惑う

顔は
わたしの
面（おもて）なのだ



※愛媛県総合運動公園にて



みんなは
つくられる

みんなになるように
教えられて

わたしはわたしだから
あなたはあなたで

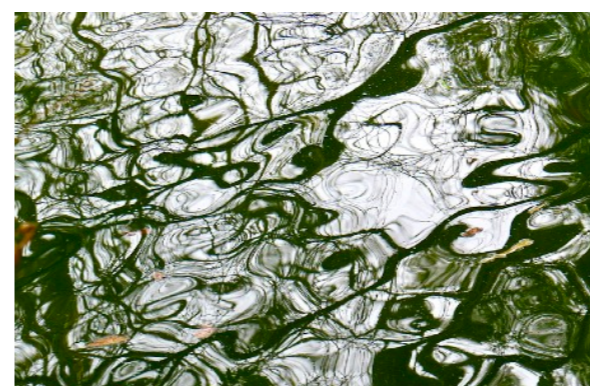
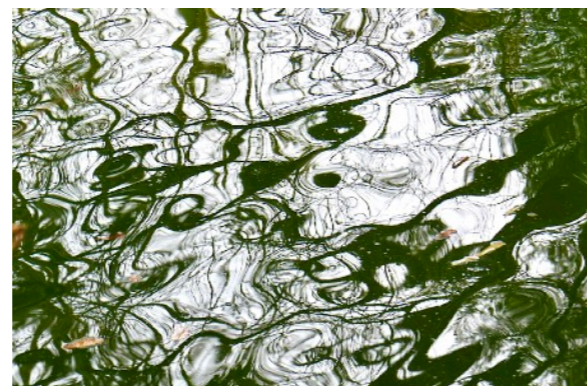
あなたはあなただから
わたしはわたしでいられるのに

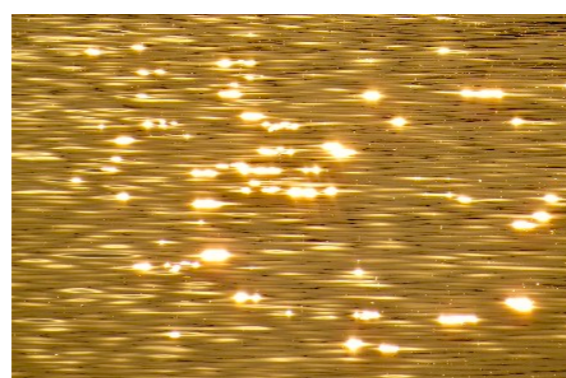
現実には
つくられる

それがひとつだと
教えられて

わたしのなかにも
たくさんの現実があり

それぞれの理由があるから
それはひとつにはならないのに





※愛媛県松山市・重信川河口にて

見えているのは
ただ見えているものではない

そのなかに
見えていないものをこそ
見つけなければならない

だから
わたしはたしかに見て
光の源を探そうとする

聞こえているのは
ただ聞こえているものではない

そのなかに
聞こえていないものをこそ
聞かなければならない

だから
わたしはたしかに聞いて
奏でられている歌を聴きとろうとする

考えているのは
ただ考えていることではない

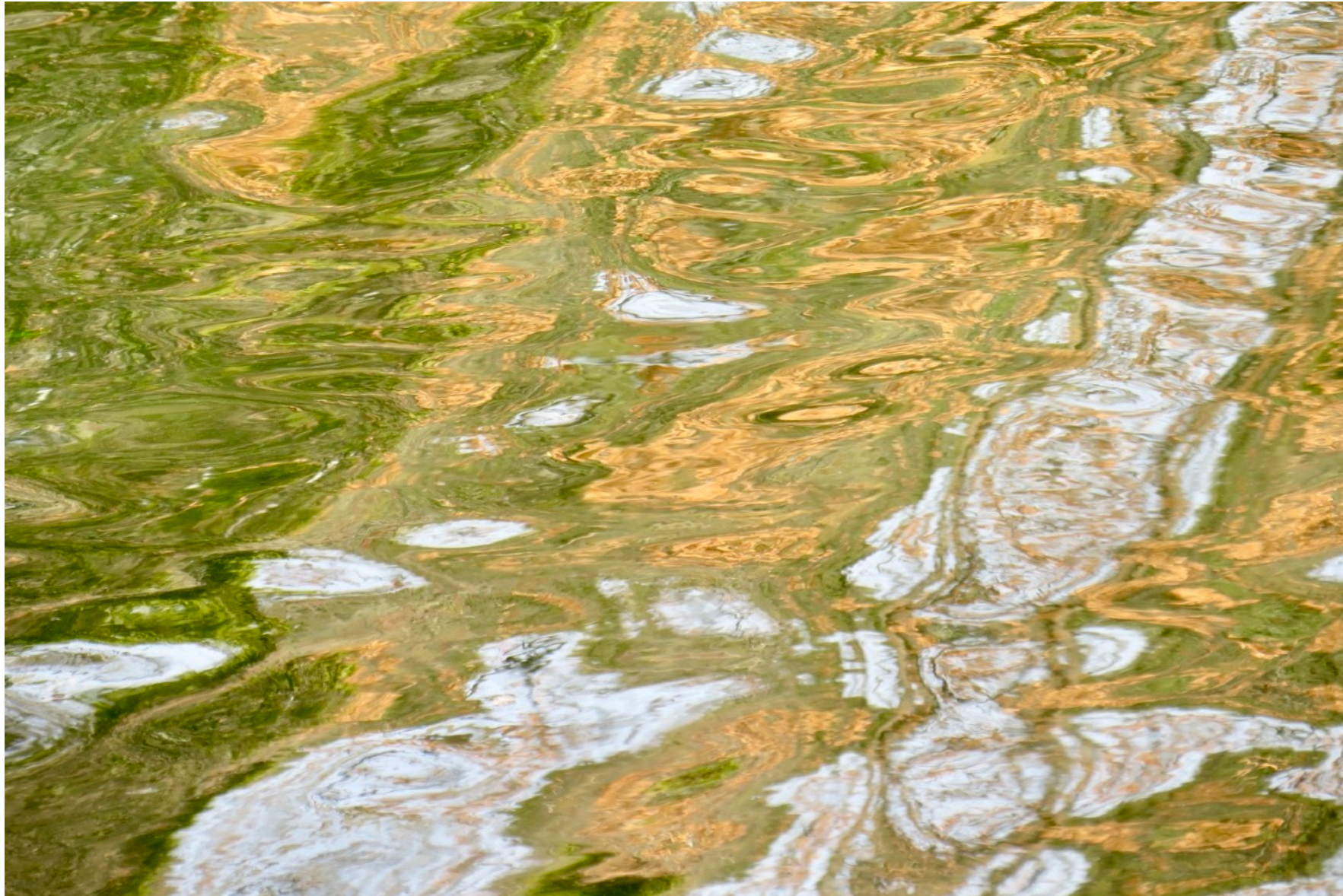
そのなかで
考えにならないことをこそ
考えていかなければならない

だから
わたしはたしかにたしかに考えて
考えの深みへと赴こうとする

言葉にするのは
ただ言葉にすることではない

そのなかで
言葉にできないことをこそ
言葉にしなければならない

だから
わたしはたしかに言葉とともに
ポエジーを生きようとする



宛先をもたない
手紙を書くように

手紙を壘に入れて
海に投じるように

詩は紡がれる

だれが語るのか
だれに語るのか

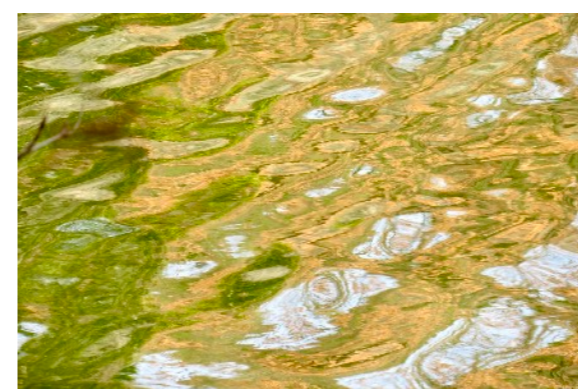
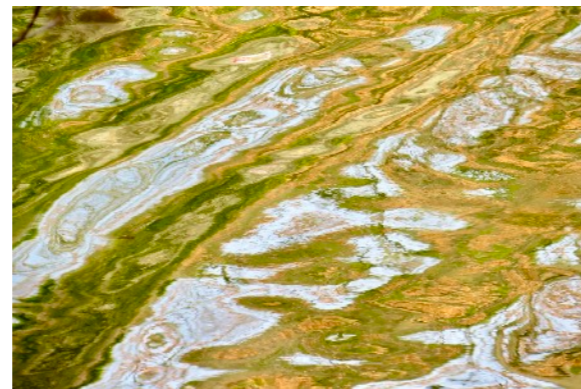
透明な深みから
わたしのなかの誰かが
不在のあなたへと語る

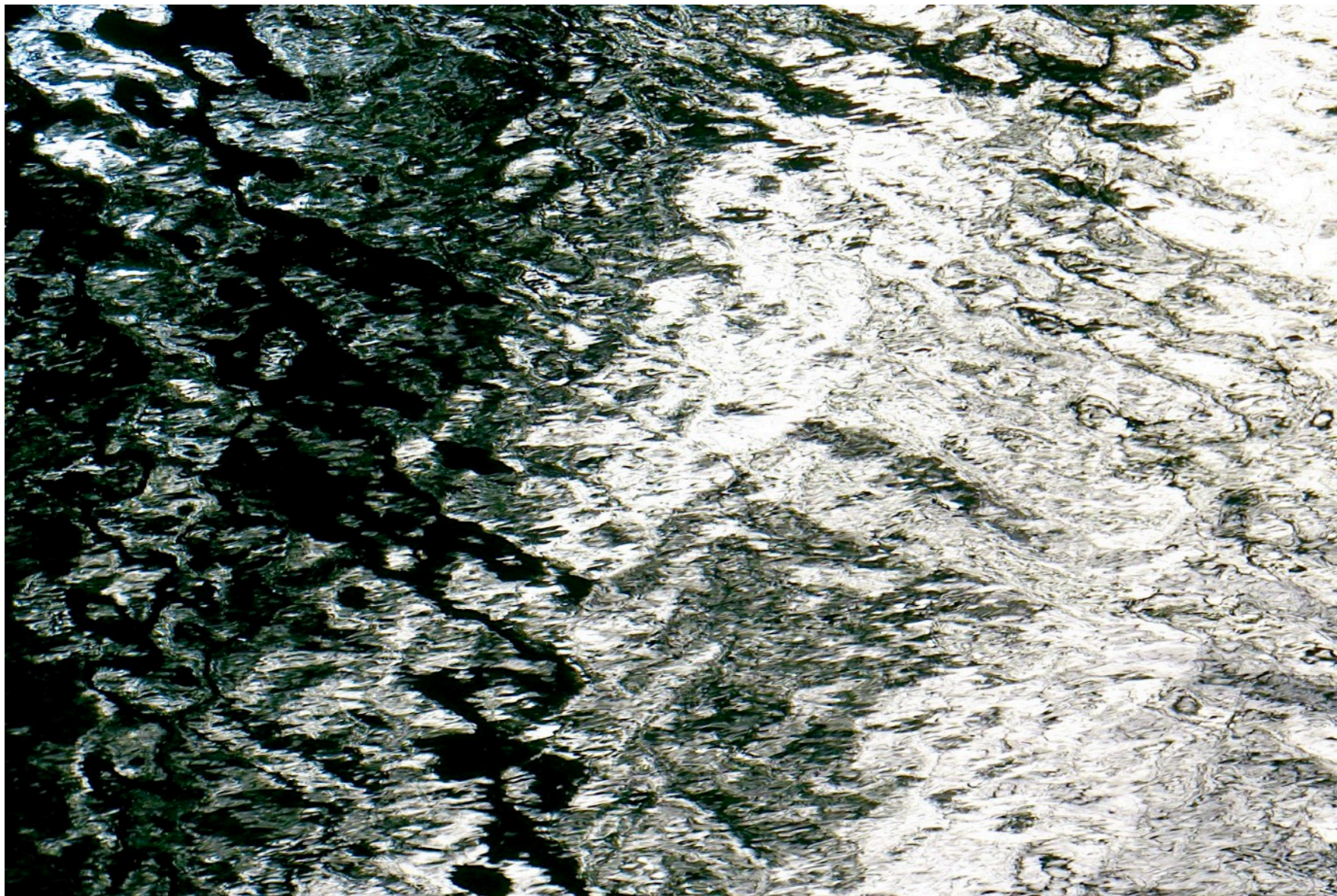
不在のわたしが
わたしのなかの誰かへと語る

不在から不在へ

だれでもない者から
だれでもない者へ

時空をこえて
言霊は捧げられてゆく





感情的になるのは
感情の豊かさではない

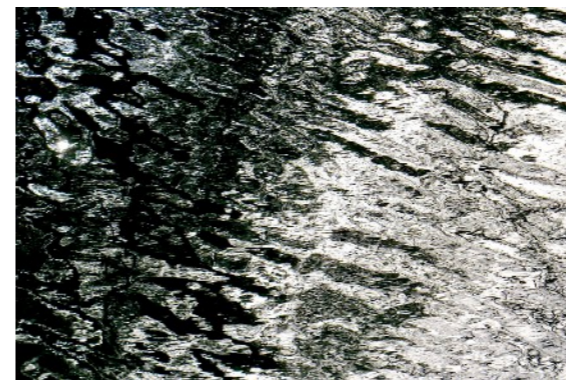
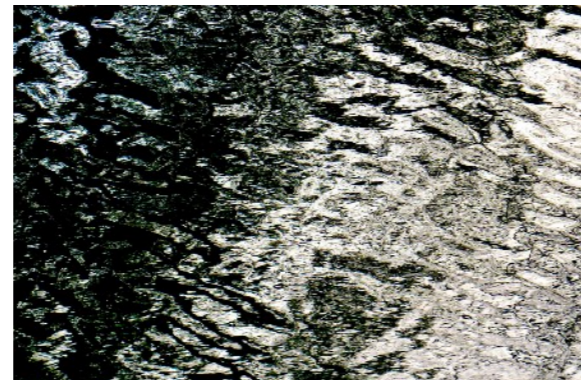
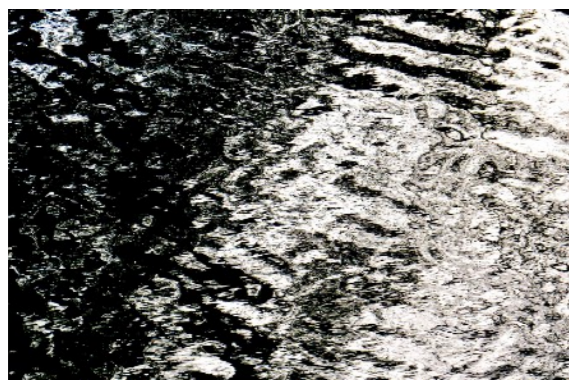
豊かになればなるほど
そこに包容されている
無数の感情は共鳴し
響きあいはじめる

そこでは
喜びも悲しみも怒りも
すべては変容し
重なりあいながら
愛を奏でているから

知的にふるまうのは
智慧あることではない

智慧あるとき
知ることは
知らないことへと
開かれている

そこでは
知識も概念も定義も
ひとときも
立ち止まってはいない
立ち止まったとき
智慧はすでに失われているから





かたちだけの
踏み絵なら
踏むがいい
躊躇うことなく

じぶんだけが
キレイでいることは
できないから
ともに汚ればいい

踏み絵を踏むことも
ともに汚れることも
避けて通れない道ならば
踏むがいい
汚ればいい

かたちなき
踏み絵を拒み
真に汚れることを
拒めばいいのだ

踏み絵を踏むのも
汚れるのも
その道を通らなければ
行けない場所への道なのだから





教えられていたゲンジツが
ゲンジツとは思えなくなる時

いままで見ていたのは
ゲンジツの影なのかもしれないから

ゲンジツとはなにかを
問うことから
はじめなければならない

影と光の交錯する
ゲンジツに迷いながら

教えられていたホントウが
ホントウとは思えなくなる時

いままで見ていたのは
ホントウの夢なのかもしれないから

ホントウとはなにかを
問うことから
はじめなければならない

夢また夢のあいだで
ホントウを探しながら

教えられていたワタシが
ワタシとは思えなくなる時

いままで見ていたのは
ワタシの幻なのかもしれないから

ワタシとはなにかを
問うことから
はじめなければならない

ワタシがワタシであるための
たしかな記憶を辿りながら





風になびき
流されてしまう
そんなときもあるだろうが
じぶんであることは
手放さないでいる

だれもが
そうするとしても
わたしは
だれもじゃないから
わたしでいる

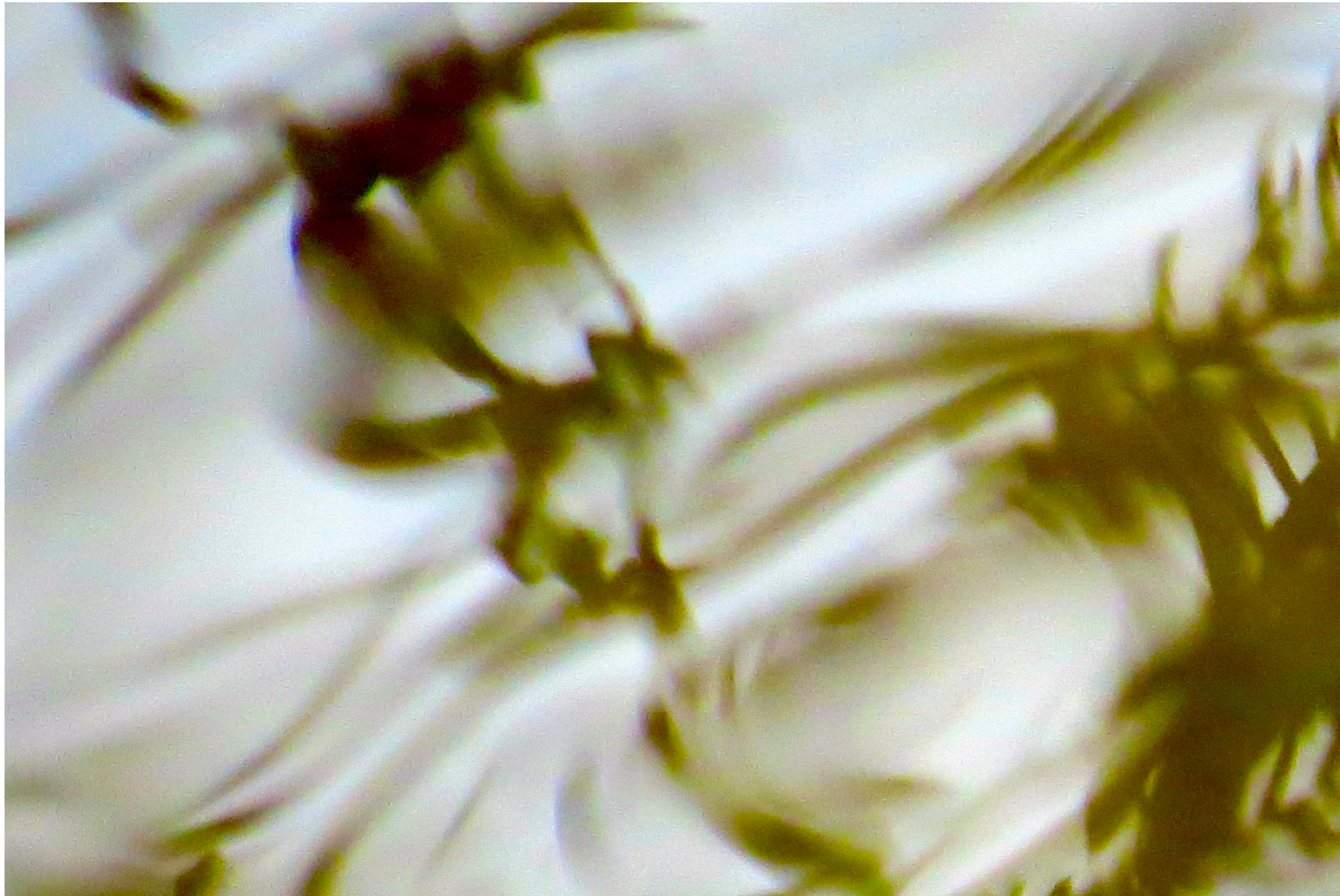
答えが
どうしても
みつからないときも
問いつづけることを
やめないでいる

じぶんが
わからなくなるときでさえ
わからないままに
じぶんであることから
目をそらさないでいる



☆photopos-2747

2022.3.16



わからなくなる

なにが良いのか
なにが悪いのか

わからなくなる

なにが偶然なのか
なにが必然なのか

わからなくなる

わかっているのか
わかってはいないのか

わからなくなる

見えているのか
見えていないのか

わからなくなる

光なのか
影なのか

わからなくなる

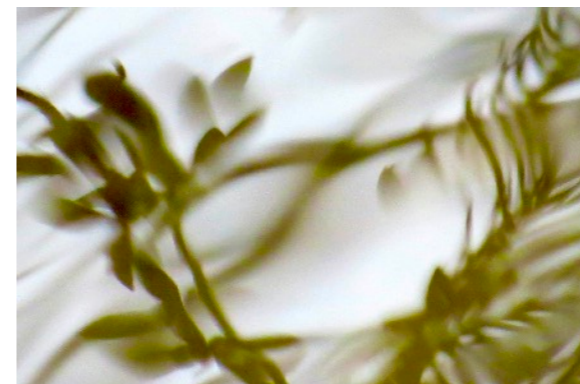
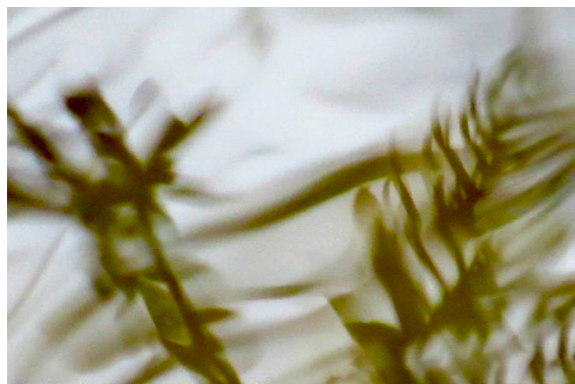
意味はあるのか
意味はないのか

わからなくなる

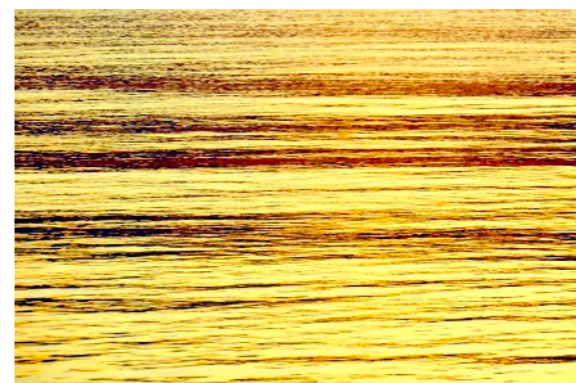
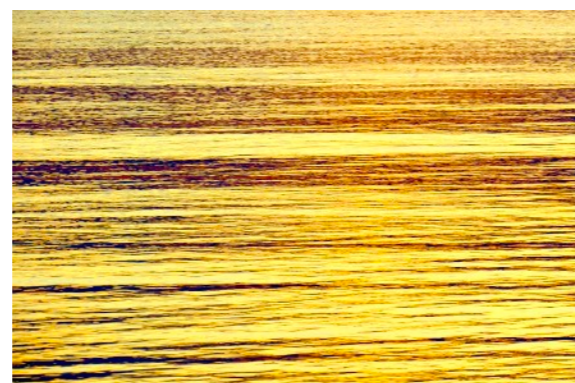
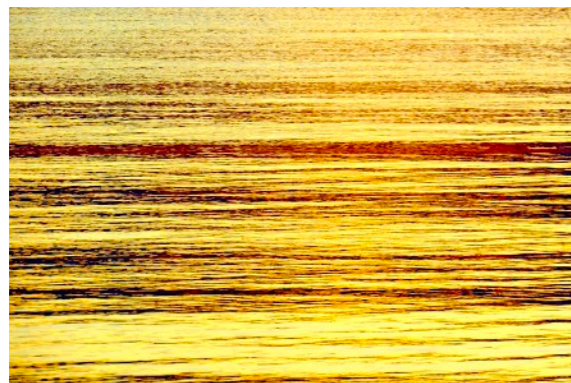
わたしはだれなのか
わたしはだれでないのか

わからなくなる

わからなくなることで
はじめてなにかがひらかれてゆく



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて



※愛媛県松山市・重信川河口にて

与えるものが
与えられる
それが
宇宙の法則だ

けれどひとが
生き難さを感じてしまうのは
与える時と
与えられる時のあいだに
遙かな河が流れているからだ
ろう

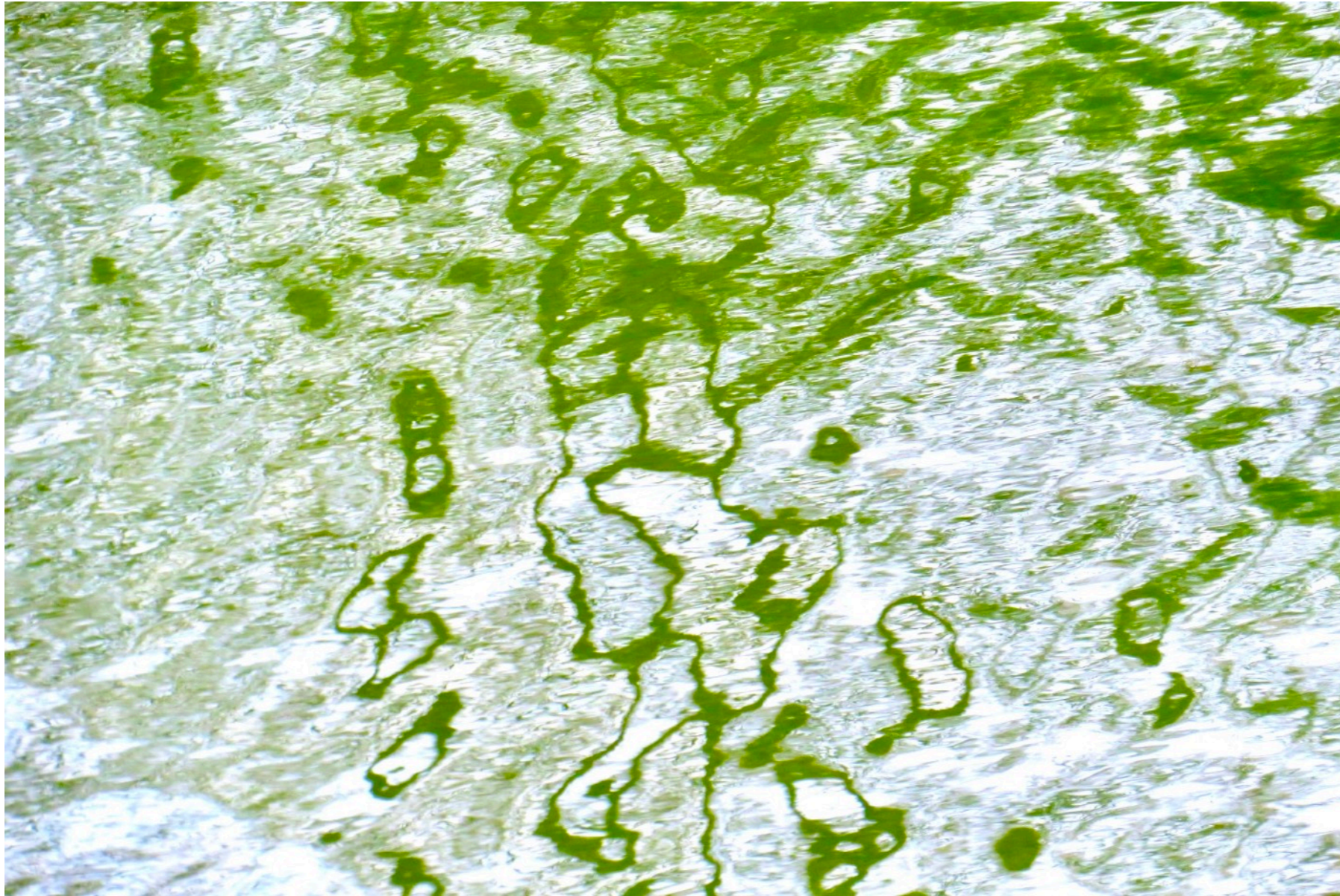
対岸へと渡り
また此岸へと戻るそのあいだ
を
ひとは根気よく待たねばなら
ない
そのことを知るために
ひとは生まれてくるのだ

他者とは
時を隔てた
じぶんだから

ひとの上にひとはなく
ひとの下にひとはなく

上なるものは下となり
下なるものは上となる

神への祈りさえ
はるかな時を超えて
他者としての
じぶんへと捧げられている



外から
かたちが
与えられるとき

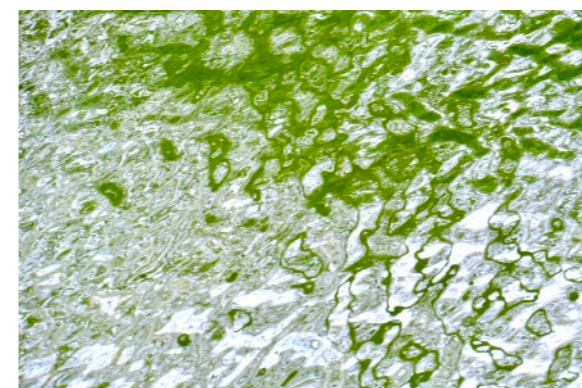
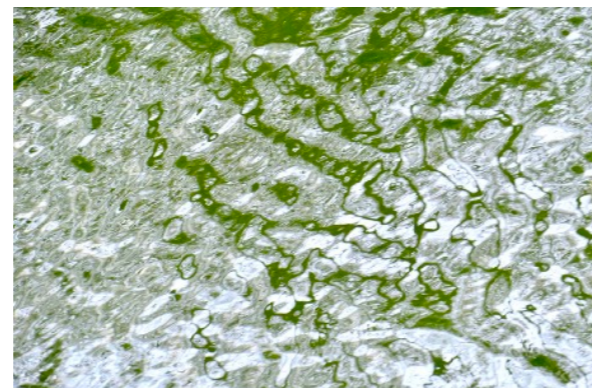
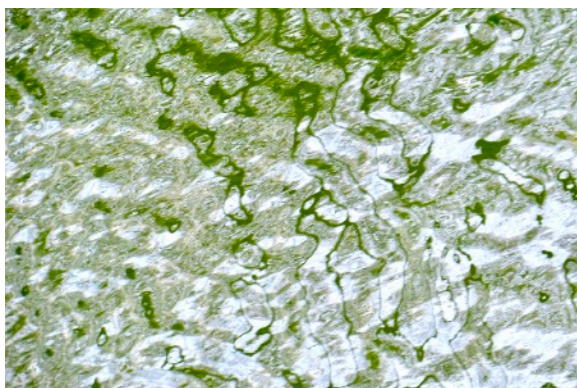
かたちは
閉じてしまい
変わることができなくなる

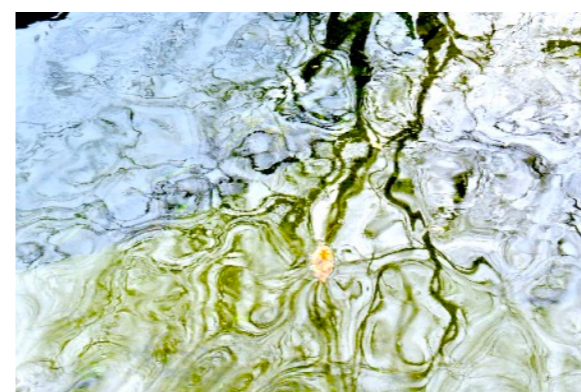
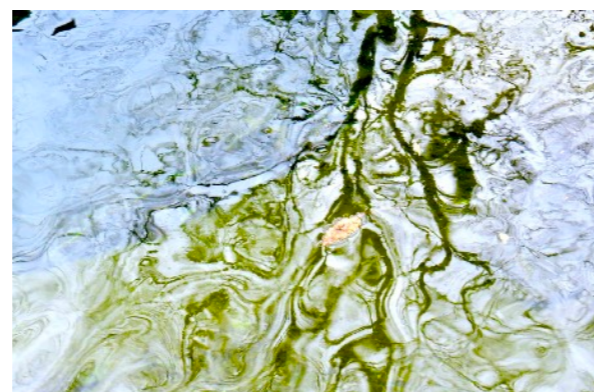
閉じられたかたちを
ただ守ろうとするばかりだ

内から
かたちが
育ってゆくとき

かたちは
開かれながら
変化する型となる

開かれたかたちは
あらたなかたちへと
自在に変わりつづけられる





※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

わたしはかつて
門の向こう側の世界にいた

世界は閉じてはいないけれど
門を通らなければ
行き来することはできない

わたしはいま
門のこちら側にいる

いまはもう忘れてしまったが
はるかなむかし
門を通過して
こちら側に来たのだ

なぜだかわからないが
わたしはまた
門の向こう側へと
帰らねばならない

門には門番がいる

門を通るには
門番に通行手形を見せねばならない

門番は通行手形に記された
魂の文字で
門を通すか
通さないかを
決めるのだという

通行手形には
わたしがもともと持っていた
魂の文字を重ねて
こちら側で得た
魂の文字が刻まれている

わたしはどんな文字を
魂に刻んできたのだろう

わたしは門のこちら側と
向こう側を見くらべてみる

わたしはなにをしてきたのか

そうして
わたしは門番に
通行手形を渡し
許可を求める